

「コミュニティソーシャルワーカーによる対人援助の終結」をテーマとすること

○ 東洋大学大学院 佐久大学 氏名 上西一貴 (会員番号 009287)

キーワード3つ：コミュニティソーシャルワーク 対人援助 終結

1. 研究テーマについて

本研究の目的は、現在の日本の社会福祉に即した新しい対人援助の終結概念を提示することである。

本研究は次の2つの視点を有する。第1に終結をミクロレベルからマクロレベルの接点としてあらわれるものとする視点である。終結は援助者とクライアントの二者関係のなかだけで生じるものではない。援助の担い手は専門職援助者だけでなく、メゾレベルのコミュニティも関係する。さらに専門職援助者自身も資源の一つであり、終結は有限資源の割り当てというマクロレベルの問題をも含んでいる。

第2に援助者を主人公としてプロセスを捉える視点である。実践においてはクライアントを主人公としてプロセスを捉えることが求められる。社会福祉は人の生活に着目するが、クライアントの生活は死亡するまで続くため、クライアントを中心に置くと終結は見出しにくい。専門職援助者の目的的行為としてプロセスをみたときに援助者の都合として終結が成立する。

終結という場合、終わりそのものをあらわす点としての終結と、終結に向けて働きかける期間としての終結という2つの意味があり、それぞれを整理しながら研究する必要がある。本研究では前者を終結の要件として、後者を終結に向けた働きかけや判断を含むプロセスと置き換えて研究を進めている。

これらをふまえて研究目的を達成するために、終結概念の変遷とその背景を明らかにするための文献調査、終結のあらわれ方を確認する記録の資料変換分析、終結の要件と背景を明らかにするための実践者への質問紙調査、終結段階の詳細を明らかにする実践者へのインタビュー調査などによって研究を進めている。

2. 研究テーマ設定の動機・理由

本研究のテーマの根本には「ソーシャルワークの終結とはどのようなことを指しているのか」という単純な問いがある。例えばソーシャルワークプロセスにおいてフォローアップは終結の後に位置づけられるが、これは援助が終わっているのか、または終わっていないのかというような単純な問いである。

終結に関心を持つようになってから、さまざまな機会に終結というコトバを意識的にき

いたり、実践者にたずねたりした。その結果、終結を強く意識している実践者と終結はないという実践者がいることがわかった。このような経験から終結に対して関心を強め、後期課程から終結の研究を始めた。

研究を始めると、国内外問わず、ソーシャルワークにおける終結は他の局面と比較して研究対象として注目されてこなかったことがわかった。そのため、実践をまとめた著書や概説書等で記述されることが多く、経験的データに基づく研究成果は数少ない。米国や英国では主にクリニカルソーシャルワークの場面における終結が研究され、なかには経験的データに基づく終結の要件を取り扱った調査もあるが、近年はあまりみられない。この点で現在の日本の社会福祉に即した終結について研究する余地があると考えた。

3. 研究テーマ設定に至る経緯

前期課程のときはソーシャルワーク教育の標準と機関プログラムの独自性について研究していた。しかし、社会人院生の実践の話や、参加を許していただいたコミュニティソーシャルワーカーの事例検討会などの機会に恵まれて、様々な実践を知るようになるにつれ、枠が定まっていない実践に興味が移っていった。開始と終結は枠そのものである。枠が曖昧である実践において終結はどのようにあらわれるのかという関心があった。

こうして報告者の少ない経験のなかで、最もリアリティをもって想像できた実践はコミュニティソーシャルワーカーによる実践となった。その実践はアウトリーチを基本として、住み慣れた地域で可能な限り生活を続けることを目指し、インフォーマル資源を含むチームで援助を行うような枠を設定しにくい実践であった。こうした実践はクリニカル実践を中心とした終結の先行研究では取り上げられていないものである。

4. 研究テーマに取り組んでいく上での悩みや困り事

後期課程に進学する前後で複数の方々から心配をいただいた。例えば「誰もやっていないということは、できないか、やる意義がないかのどちらかだ」や「終結をみたいのであれば終結がはっきりしているところを研究したほうがいい」、「制度的な側面を取り扱う必要がある」などである。また「ソーシャルワークにおける終結を研究として取り上げる重要性を示す問題がなければならぬ」というコメントをいただいた。これらを本研究への批判と読み替えれば、本研究はまだこれらの批判に十分に応えることができていない。

先行研究が少ないために終結を研究する意義を説得する必要がある。しかし、本研究は興味関心としての単純な問いから研究を始めて、現実の問題から研究を始めなかった。一般的な順番とは逆に研究を始めたため、研究の意義の説得力が弱い。これは投稿論文の査読のときだけでなく、調査への協力依頼のときにも壁になる。単なる興味関心ではなく、他者を説得可能な終結研究の意義となる現実の問題を探さなければならない。これが本研究で直面している大きな課題である。